むかし、むかしの来丸村の話や。

何日も何日も雨が降らず、日照りが続くという、ひどい年があった。

あの大きな手取川でさえ、水の流れている所が、どこもなくなり、向こう岸の川北まで川底を歩いて渡れるほどになった。

村のどの家を見ても、井戸は涸れて、飲み水にも困るくらいやった。

田んぼは水を引くどころか、カラカラで、稲も白く枯れそうやった。

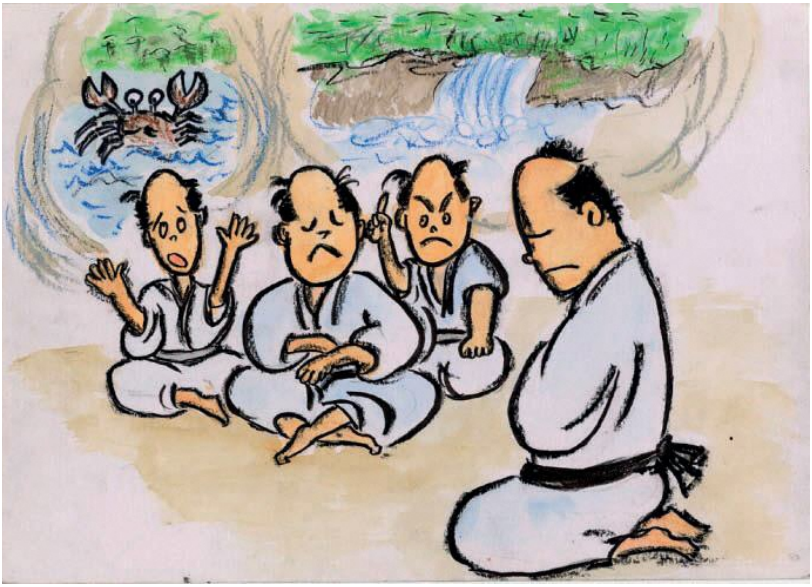
ある日のこと。肝煎(きもいり)どんの家に、村の人たちが集まって、水の相談が始まった。

「ほか村と違うて、わしらの村は池もないし、こう、雨が降らんと、稲も枯れてしまう」

「むかし、和気(わけ)の村のもんらが、夜中にこっそり、鍋谷(なべたに)の堤を切りに行ったという話を聞いたことがある。わしらの村も、湯屋(ゆのや)村の堤から、水をもろうてくることはできんもんかのう」

「だらなこと言うもんでない。鍋谷の堤から水を盗もうとしたら、化け蟹(がに)が出て来て、和気のもんな、こりごりな目におうて帰って来たという話やないか。それより、雨乞(あまご)いをしたらどうやろ」

「そうや、雨乞いをしよまいか。村のもんらみんなして、氏神様(うじがみさま)にお願いしよう」



こうして翌朝、まだ夜が明けないうちに、家々から、お父やお母が、肝煎どんの家の前に集まった。

大たいまつを先頭に、お供え物をもつ者、ローソクを手にした者や、お神楽（かぐら）を踊る女たちなど、長い長い列を作って、村でいちばん高い所にある、氏神様の気多（けた）神社まで登っていった。

雨乞いのお祈りは、次の日も、その次の日も、また、その次の日も続けられたが、雨は一粒も落ちてきそうになかった。

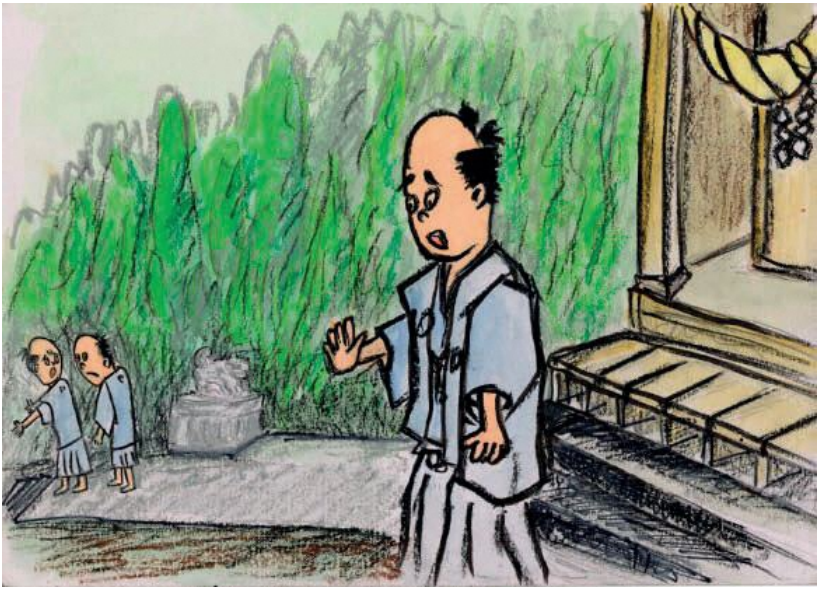
「あーあ、雨乞いなんかしても、降りそうにない」

「やめりゃどうや、するだけ無駄でないか」

「肝煎様が言わしたことやから、これまでしとったけど、もうどーもならん。やめとこさ」

こうして、一人減り、二人減りして、最後には、肝煎どん一人がとり残されてしまった。

それでも肝煎どんは、毎日一人で雨乞いを続けた。



何日かたったある夜更け。肝煎どんの夢の中に、氏神様が現れ、

「よく、辛抱しましたね。もうしばらくお待ちなさい。わたしが、白山(はくさん)の神様の所に行って、千蛇(せんじゃ)が池の水を分けてもらうようお願いをしましょう」

そう告げると、氏神様は、お伴の牛にまたがり、巽(たつみ)の方角に、消えて行った。

次の日の朝、肝煎どんは、いつものように一人で、氏神様へでかけた。

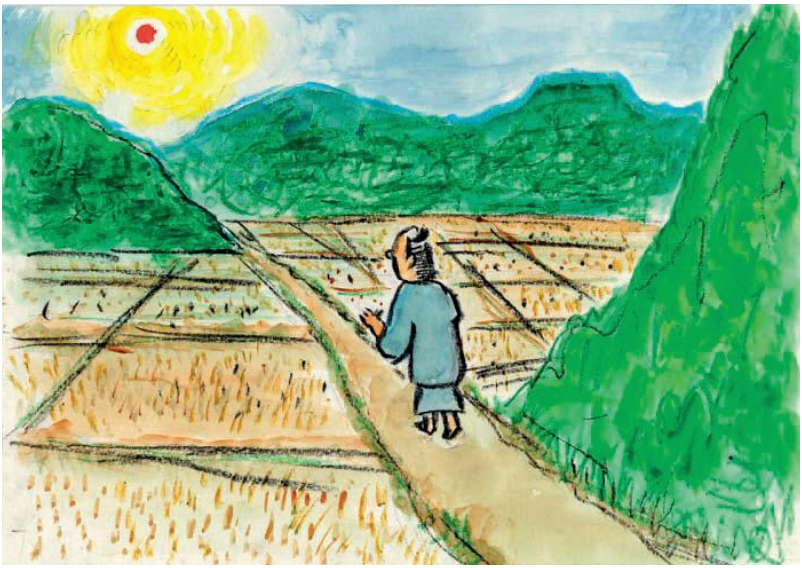
「このままでは、今年は米がとれそうにないなぁ」

肝煎どんは、独り言を言いながら、歩いていると、どこからか、ポコポコ、ポコポコと水がわきでているような音が聞こえてきた。

肝煎どんは、ゆうべの夢のお告げのことを思い出して、ひょっとして、水が流れているのではと、あちこちをキョロキョロ見回したが、水は見当たらない。

「どうかしとる。気のせいや。水などあるはずぁない」

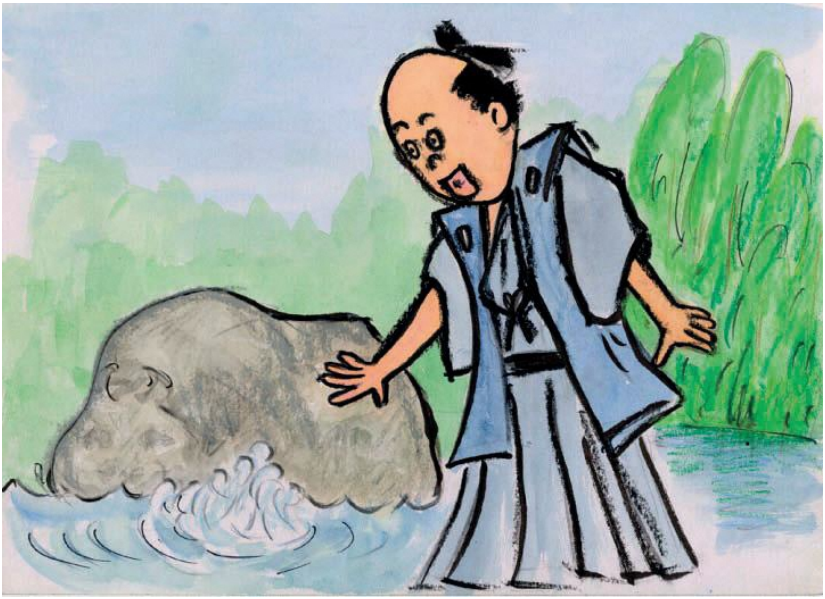
それでも、どこからか、ポコポコ、ポコポコという音が聞こえてくる。



肝煎どんは、気をとりなおして、また音のする方に向かって、歩き始めた。

すると、水の音は、だんだん大きく聞こえてきて、さらに音のする方に、どんどん、どんどん歩いて行くと、とうとう谷間にある山の田まで来てしまった。

するとどうだろう。
きのうまで、ひび割れしていた田んぼが、
キラキラ、キラキラと水で輝いているではないか。



そして、すぐ横の大岩のかげからポコポコ、ポコポコと大きな音を立てて水がわき出ていた。

「わぁ、水だ、水だ。氏神様のお告げの通りだ」

肝煎どんは、踊り上がって喜び、大急ぎで村の人たちの所へ知らせに走った。

肝煎どんの話を聞いた村人たちは、氏神様のおかげだと喜んだ。

この清水（しょうず）のおかげで、村では、いつもの年のように、お米がたくさんとれた。

それからというもの、この清水は、どんなに日照りの年でも、涸れたことがなかった。

来丸村では、この清水のことを氏神様の気多神社のひと字をとって、気の清水と呼ぶようになった。

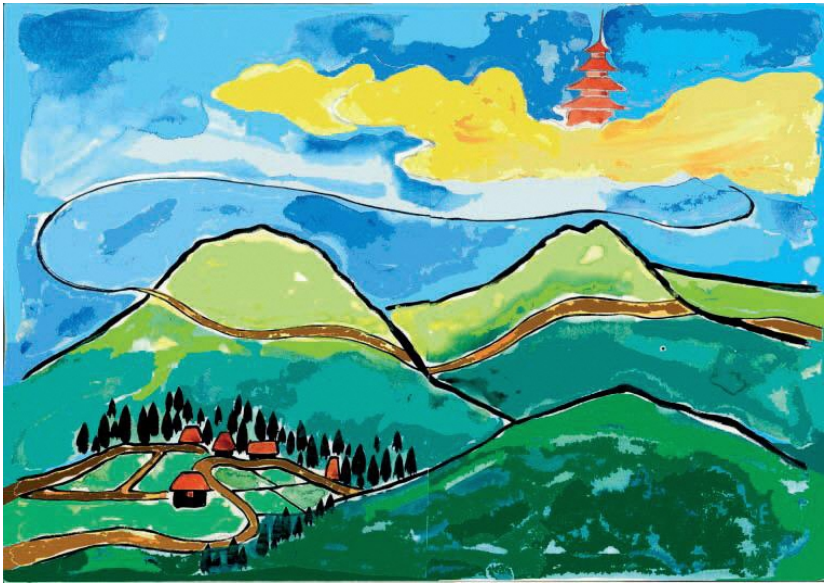
また氏神様がお伴にしていた牛は、牛岩となって、この清水を守るようにして、村の人達が水を汲みにくる姿を、いつまでも見守っていたということや。

絵・後　泰夫

むかし、むかし、ずっとむかしのことです。

寺井山（てらいやま）のふもとに小さなほこらがあって、そのそばに、こんこんとわきでるきれいなしょうずがあり、田うえのじきには、あたりいちめんに、あやめの花がさきほこりました。

そのしょうずの前には、小さなひろっぱがあり、朝な夕なには人びとは、しょうずの水をいただいたり、仕事のほね休めにひと息いれたりして、からだを休める場所にしていました。



寺井山から尾根づたいに、和田山へとつづく道のはては、やがて唐天竺（からてんじく）へと続き、そこにはきれいで、心のやさしいお姫さまがすんでいらっしゃるというはなしが、いつとはなしに人びとのうわさになっていました。

うわさはうわさを呼んで、はなしがだんだんくわしくなり、お姫さまは多くの召使いとかぞえきれないほどたくさんの宝物や道具にかこまれ、

「こんなりっぱな道具が使えたらなぁ。」と、村びとたちがため息をもらすと、お姫さまは、「使ってもいいよ。」と、すぐ貸してくださるということでした。

そのうわさを信じている人たちは、いちどでいいから宝物のいっぱいつまったお蔵へいってみたいと、夢みたいなことを考えたりしました。

あるとき、村いちばんの働きものが田んぼ仕事をした帰り、しょうずのひろばを通ったときのことでした。

ほこらにむかってかしわでを打ち、しょうずの水を一口のむと、

「ああ、うまい。もう何もいうことがない。　でも親の命日に法事をしてあげたいが、なに一つ道具がない。困ったもんや。」とつぶやき（唐天竺のお姫さまが道具を貸してくれたらなぁ）と、夢みたいなことを考えたりしました。そして思わずかしわでを三つ打ってしまいました。

あくる朝、いつものように、だれよりも早く田んぼにでかけました。しょうずのひろばを通り、ほこらに参ろうとして、びっくりぎょうてんしてしまいました。すばらしいごぜんがつみあげてあるのです。

「これは、これは、お借りできるものならお借りしたいんですが」と、おそるおそるお願いしました。

ところが「お借りするなら、早くかたづけなさい。」と、いわんばかりにポツリ、ポツリと雨が降ってきたのです。

はたらきものはびっくりして、田んぼ道具をほったらかして、二十人まえのごぜんをいそいで家に運びました。こうして、その日のうちに法事をすることにしたのです。

急なしらせにびっくりして集まった親類の人たちは。まっかな二十人まえのすばらしいごぜんにまたまたびっくり。

「こんなりっぱな道具をどこから借りたんや。」

「そろって二十人まえ貸してくださるのはどなたさまや。」

はたらきものは、きのうの夕方のことやけさのはなし、そしてにわか雨のことなど、親類の人たちに話しました。

「はたらきものじゃから、神さまか仏さまが貸してくださったかもしれん。」

「借り物じゃから大事に使わしてもらわにゃ。」

「みんなであとかたづけも手伝おうじゃないか。」

ということになりました。

こうして法事も無事おわり、みんなでごぜんをきれいにみがきあげ、手入れもすんだころには、ちょうど雨もあがり、夜ぞらにはうつくしく星がまたたいていました。

さっそくはたらきものを先頭にみんなでしょうずのひろばへごぜんをはこび、

「ほんの心ばかりですが・・・」とおれいに二十一もんのお金をつつんで、そっとおいて帰りました。

あくる朝も、はたらきものは元気よく田んぼに出かけました。しょうずのひろばへ寄ってみると、タベお借りしたごぜんの道具はかたづけられ、もとのひろばのままでした。

「きのうはほんとうにありがとうございました。」

はたらきものは、ほこらに深々と頭をさげました。

その日もいっしょうけんめいに働き、帰りにはふたたびほこらにお参りし、家に帰ってみてはたらきものはびっくりしてしまいました。

ごぜんといっしょにおいてきたはずの二十一もんのお金が床の間に返されていたのです。

『しょうずの水をいただき、かしわでを三つうって、お願いごとがかなった』というこの話は、すぐに村じゅうにひろがりました。

そして（いっしょうけんめい働く正直者）（おとしよりをたいせつにするお嫁さん）など、心の美しい人が願いごとをすると、その夜、夢の中にきれいなお姫さまがあらわれました。

そのお姫さまの足元には、白やむらさきのあやめの花が、それはそれは、いっぱい咲き乱れていました。こうして、いつのまにか、お姫さまを「あやめ姫さま、あやめ姫さま」と呼ぶようになったのです。

そのうち、いやな話がぼつぼつ聞こえはじめてきました。自分が道具を持っていながら

「道具を出し入れするのがめんどうだ。」

「道具を貸してください。」と願い出るものもあらわれました。

そんなものには、きたない道具しか貸してもらえませんでした。

また、いつまでも借りたまま返さなかったものは、病気になったりなど、いろいろな話が伝わりました。

そして、とうとう「お金がどうせもどってくるのなら、お礼の金なんて乗せないでおこう。」というものも出てきたのです。

こんなことがつづきはじめると、しょうずの水の湧(わ)きかたが、だんだん少なくなってしまいました。それとともに、あやめ姫さまへの願いごとも少しずつ叶(かな)わなくなくなり、そのうち、とうとういっさい叶わなくなってしまいました。

しょうずの水がかれ、あやめ姫さまへの願いごとが叶わなくなったとき、村の人たちは考えはじめました。

「あやめ姫さまに頼んだり、願いごとをいうまえに、自分たちでくふうしたり、力を合わせなければ・・・」

「ぜいたくを考えたり、怠けたりするのではなく、毎日をいっしょうけんめいに生きていかなくては・・・」こう考えた人びとは、今まで以上に正直にいっしょうけんめいに働きはじめました。

そのうち、いつのまにか、しょうずの水がふたたび、こんこんとわくようになり、人びとはおいしい　しょうずの水をあじわえるようになったということです。

絵・松村　芳明